

平成24年6月19日

No. 12 - 102

株式会社 いよぎん地域経済研究センター

収入が減少するも、将来に備えて貯蓄をする大学生 ー県内大学生の暮らしぶりー

株式会社いよぎん地域経済研究センター（略称 I R C、社長 山崎 正人）では、このたび県内大学生の暮らしぶりについて取りまとめましたので、下記のとおりお知らせいたします。なお、詳細は、2012年7月1日発行の「調査月報 I R C・2012年7月号」に掲載いたします。

【調査概要】

大学生の暮らしぶりを把握するため、2012年4月に県内大学生（愛媛大学法文学部「地域政策論」、松山大学経営学部「地域産業論」「ミクロ経済学」）の受講生371名を対象にアンケートを実施した。

記

【調査要旨】

1. 月間の収入総額の平均は、自宅生が6.8万円、自宅外生が11.0万円であった。
2. 「親から仕送りをしてもらう」自宅外生は前回調査より15.2ポイントと大幅に減少し、67.0%となった。一方、「奨学金をもらっている」自宅外生は9.5ポイント増加し、57.0%となった。自宅外生の収入における仕送りのウエイトが奨学金へとシフトしつつあるのかもしれない。
3. 「毎月貯蓄している」という学生は、自宅生が67.1%、自宅外生は58.0%となった。毎月の平均貯蓄額は前回調査では自宅生1.6万円、自宅外生1.0万円であったが、今回は自宅生1.7万円、自宅外生1.4万円とどちらも増加している。
4. 貯蓄残高は、「10～30万円未満」（25.9%）との回答が最も多かった。貯蓄の目的では、「将来の備え」（39.5%）との回答が最も多く、将来の出費に備えて貯蓄をしているようだ。
5. 今後の支出は、35.2%が「減らしたい」と回答しており、「増やしたい」の15.7%を上回り、D Iは▲19.5と支出抑制意向が強い。一方で、学習費やファッション費のD Iはプラスであり、前向きな消費意欲もうかがえた。

以 上

はじめに

当社では、県内大学生の暮らしぶりを把握するため、県内大学生を対象にアンケートを実施した。以下はその結果である。

アンケートの概要

時期：2012 年 4 月中旬

対象：愛媛大学法文学部「地域政策論」、
松山大学経営学部「地域産業論」、
「ミクロ経済学」の受講生 371 名

方法：教室でアンケート用紙を配付し、
その場で回収。無記名方式。

回答者属性

大学	愛媛大学	37.7%	松山大学	62.3%
性別	男性	57.7%	女性	41.8%
	不明	0.5%		
学年	1 回生	0.3%	2 回生	49.6%
	3 回生	35.0%	4 回生	13.2%
	その他	1.6%	不明	0.3%
出身地	愛媛県内	67.7%	四国3県	11.6%
	中国・九州	15.1%	関西	1.3%
	関東	1.3%	その他	2.7%
	不明	0.3%		
住まい	自宅	43.1%	自宅外	55.5%
	不明	1.3%		

(注) 割合は、四捨五入して表記しているため、合計が 100%にならないことがある(以下、同じ)。

1. 月間の収入状況

(1) 収入総額とその内訳

県内大学生の収入総額の平均は、自宅生が 6.8 万円、自宅外生が 11.0 万円であり、自宅外生の収入総額は、2009 年の調査開始以来最低となった(図表-1)。

図表-1 毎月の平均収入額 (n = 357)

(単位: 万円)

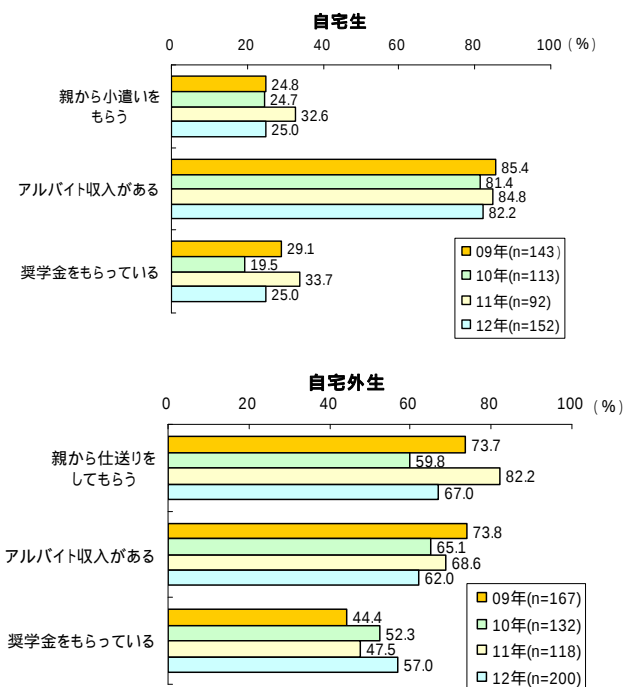
	全体	自宅生	自宅外生
収入総額	9.2	6.8	11.0
親からの援助 (小遣い・仕送り等)	2.3 (4.8)	0.4 (1.7)	3.8 (5.7)
アルバイト	3.9 (5.4)	4.8 (5.8)	3.2 (5.1)
奨学金	2.7 (6.1)	1.2 (4.9)	3.7 (6.5)
その他	0.3 (4.8)	0.4 (5.7)	0.3 (4.3)

(注) 各数字は全回答を平均したもので、〔〕内は「ゼロ」との回答を除き平均したもの

(2) 収入項目別の学生割合

「親から仕送りをしてもらう」という自宅外生は前回調査より 15.2 ポイントと大幅に減少し、67.0%となった。一方で、「奨学金をもらっている」という自宅外生は 9.5 ポイント増加し、57.0%となった(図表-2)。自宅外生の収入における仕送りのウエイトが奨学金へとシフトしつつあるのかもしれない。

図表-2 収入項目別の学生割合

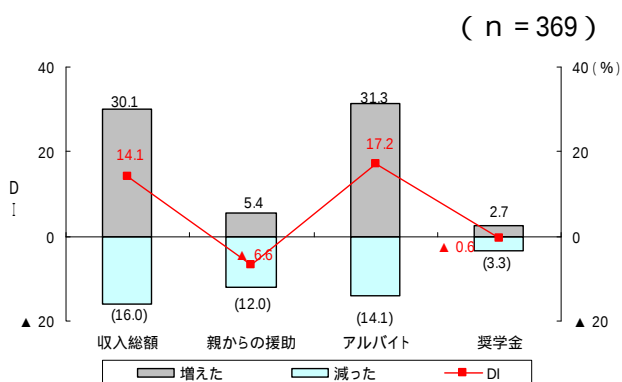


(3) 1年前と比べた収入総額の増減

1年前と比較した収入総額は、「増えた」との回答が30.1%となり、「減った」の16.0%を上回り、DIは14.1となった(図表-3)。内訳をみると、親からの援助DIが▲6.6、アルバイト収入DIが17.2となった。

DIとは「増えた」との回答割合から「減った」との回答割合を引いた数値

図表-3 1年前と比べた収入総額の増減



2. 月間の支出状況

(1) 支出総額

県内大学生の支出総額(貯蓄を除く)は、自宅生が5.1万円、自宅外生が9.6万円となった(図表-4)。

図表-4 毎月の平均支出額 (n = 357)

(単位:万円)

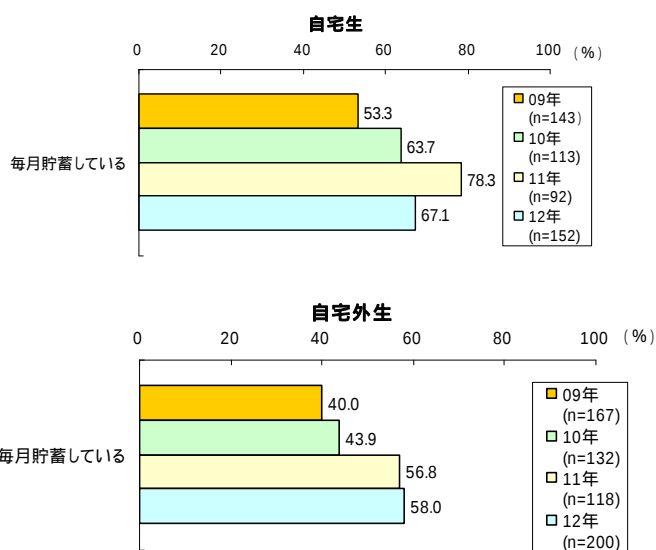
	全体	自宅生	自宅外生
支出総額	7.6	5.1	9.6
家賃	2.0	0.0	3.5
食費	1.4	0.8	1.9
学習費(授業料除く)	0.4	0.3	0.5
通信費	0.7	0.5	0.8
ファッション費	1.0	1.0	0.9
娯楽費	1.2	1.3	1.3
その他	0.9	1.2	0.7

(2) 貯蓄する学生の割合と貯蓄額

「毎月貯蓄している」という学生は、自宅生が前回調査より11.2ポイント減少し67.1%となった。一方、自宅外生は1.2ポイント増加し58.0%となった(図表-5)。

毎月の平均貯蓄額をみると、前回調査では自宅生1.6万円、自宅外生1.0万円であったが、今回は自宅生1.7万円、自宅外生1.4万円とどちらも増加している(図表-6)。とくに、自宅外生は収入総額が減少しているにもかかわらず、毎月の平均貯蓄額は前回調査よりも増加していることから、消費よりも貯蓄に重点を移す傾向が見られた。

図表-5 毎月貯蓄する学生の割合



図表-6 毎月の平均貯蓄額 (n = 357)

(単位:万円)

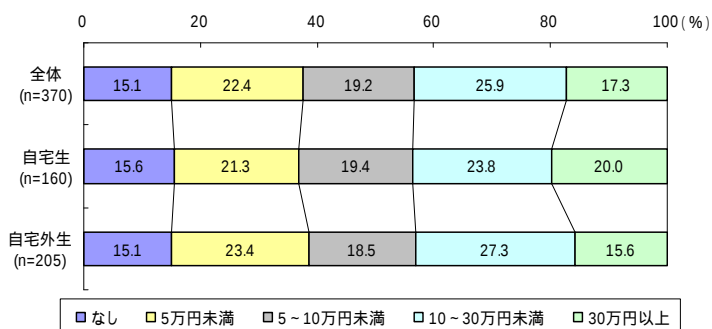
	全体	自宅生	自宅外生
貯蓄額	1.6 [2.5]	1.7 [2.6]	1.4 [2.5]

(注) 各数字は全回答を平均したもので、〔〕内は「ゼロ」との回答を除き平均したもの

貯蓄残高では、「10～30万円未満」(25.9%)との回答が最も多かった(図表-7)。

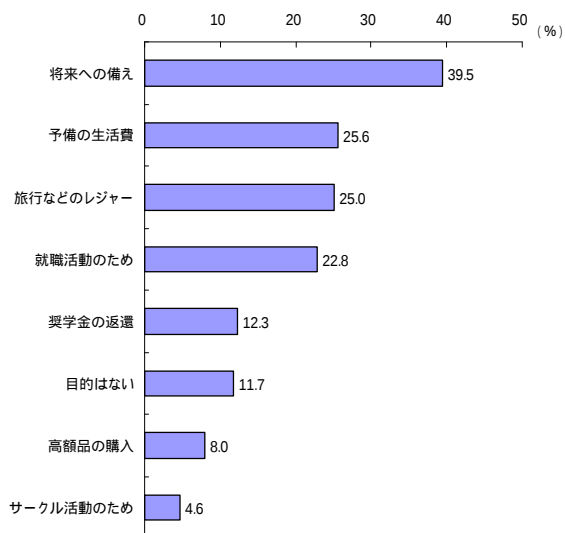
また、貯蓄の目的で最も多かったのは、「将来への備え」(39.5%)であった(図表-8)。具体的な使い道が決まっている訳ではなく、将来の出費に備えて貯蓄しているようだ。

図表-7 現在の貯蓄額



図表-8 貯蓄の目的

(n = 324、上位2つ以内で複数回答)

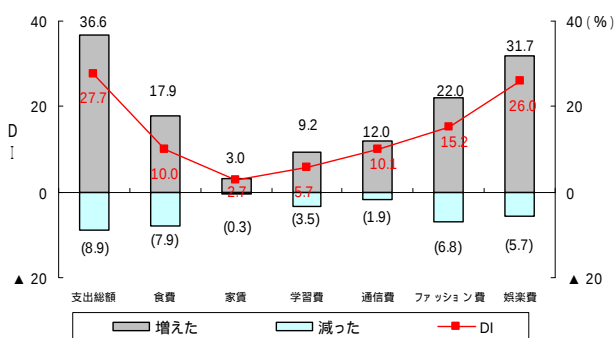


(3) 1年前と比べた支出総額の増減

1年前と比べた支出総額は、「増えた」との回答が36.6%となり、「減った」の8.9%を大きく上回り、D Iは27.7となった(図表-9)。内訳をみると、どの費用D Iもプラスになっている。特に娯楽費やファッション費が増加した人が多かった。

図表-9 1年前と比べた支出総額の増減

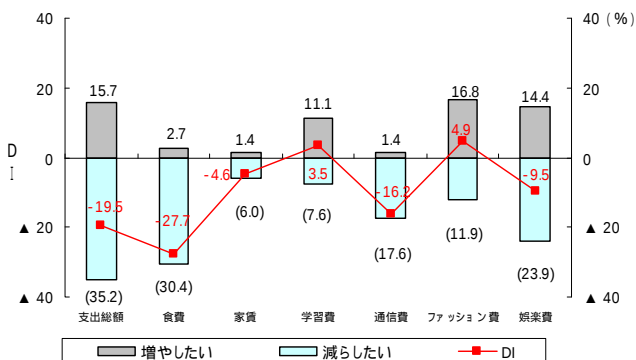
(n = 369)



(4) 今後の支出意向

今後の支出意向では、「減らしたい」との回答が35.2%となり、「増やしたい」の15.7%を上回り、D Iは▲19.5と支出抑制意向が強い(図表-10)。一方で、学習費やファッション費のD Iはプラスとなっており、自分への投資になるような消費には前向きな意欲もうかがえた。

図表-10 今後の支出意向(n = 369)



おわりに

今回アンケート結果では、県内大学生の暮らしぶりには前回調査時と大きな変化は見られなかった。貯蓄を心がける学生は多いものの、消費意欲が低いわけではなく、限られた収入のなかで、将来を見据えて堅実に行動する学生が多いようだ。

(國遠 知可)